

「関ヶ原の役」はいまも生きている

増山雄三

滋賀県彦根市の、昭和三十六年（一九六一年）頃に市長だった「井伊直愛」氏は、温和な紳士で市民の評判も良かったが、彼はかつての彦根二十五万石の城主だった、井伊家の直系で、あの井伊大老の曾孫にあたる。

いまここに、彼が市長在任中に、ある新聞社の依頼で書いた、「子孫発言」というエッセイを読んだ事があるが、そこには、彼がまだ学習院初等科時代だった頃のある日、祖父の旧井伊伯爵が急に現れ、「汽車に乗せてやろう」といって、いきなり東京から大阪までの列車に乗せられた、という話である。

それで、途中で下車したのは、岐阜県関ヶ原の寒駅で、関ヶ原の野は、今も北国街道や伊勢街道に多少の民家がある程度で、慶長五年の関ヶ原の役の頃と、殆ど変わっていない。

私も何度かここに来た事があるが、周りの山並みを見回すだけで、尾崎士郎は、武者声や太鼓それに鉦の音が、ありありと耳の奥に湧きあがってくるような感じで、涙があふれてくる様だというが、この古戦場だけは、今も生きている気がするともいう。

関ヶ原の役は、東西十五万の兵が、この盆地へ集まり雌雄を決し、日本の歴史はここから徳川時代に入ったが、尾崎士郎のナミダというのは、ここに集まった十五万の武士たち一人一人が、この日をもって、家門栄える者のもありまた、転落する者もあって、それで人生が変わった、という事ではなからうか。

さて、東京から汽車でやってきた、小学生の井伊直愛だが、おじいさんから「この野をよくみておけ。ここでお前の先祖が戦って勝手くれたから、お前はこんにち、学校にも行け、三度のごはんも食べられる。この野の事は絶対に忘れてはならない」と、言われた。

事実、武田信玄の遺臣から指導をうけ、徳

川軍団で最も勇猛な連隊長の井伊直政はこの後、石田三成の居城・近江佐和山十五万石の城主になり、その子の代になり、城を彦根へ移して、三十万石に加増された。

大坂ノ役に参加したのは、直政の子直孝だったが、この赤備えの部隊は、大坂方の木村長門守重成の部隊と激突したが、井伊の直孝行も奮戦したため、重成は次第に崩れたってしまい、彼も手傷を負ったので、馬を捨ててアゼに腰を下ろしたのである。

すると、井伊の侍大将の安藤長三郎がやってきて、重成の首を討ったので、彼はその功によって五百石を加増されたが、敵の大將を討ち取ったにしては、意外に少禄だったために井伊家を去り、家康の重臣安藤帯刀に泣きついたが、帯刀は叱り井伊家に謝ったので、その後、長三郎は千石に加増された。

ある時、浄土宗の住職が、北千住の檀家を回ったとき、仏壇に木村長門守の位牌があるのを見たので聞くと、それは安藤長三郎の子

孫だったという。

このように、井伊家は関ヶ原で戦ったために、その家来の安藤家は、木村重成の首を貰って子孫は繁栄し、関ヶ原や大坂ノ役というのは、不思議な生き方で今も生きている。

令和四年四月